

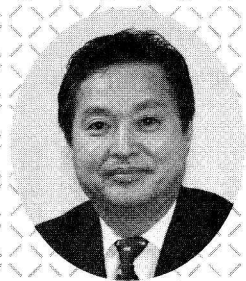
—2014夏—

水と風情 樺太(サハリン)紀行

現地ルポ

(Ⅱ)

真柄秀明



二日目。午前は豊原市内観光、午後は自由行動。現在の樺太の人口は49万5千人、うち豊原を中心とした行政区は18万9千人、州都に相應しい規模だ。因みに豊原、真岡、大泊の3市合計の人口は25万1千人、過半数が居住する。

朝9時、ホテルを出発、勝利広場、ロシア正教会、レーニン広場等を見学する。戦車や大砲、英雄の銅像やレリーフ等を並べるのが大好きなのか、広場はいずれも「我々が勝者だ」という主張の連続である。ビザなし渡航をロシアが許可するにあたって条件となっている見学経路なのであるのか。

勝利広場は日本領時代に樺太神社と護国神社があった場所だ。この広場(神社跡)から西へ真つ直ぐ延びる美しいパベード通りは扇状地特有の軽い下り傾斜がはるかに続き、見方によつては巨大な参道に映る。現在の樺太神社は鳥居もなく社もない。鳥居があつ

たであろう広場には兵士やソビエト連邦にとつての功労者等の像が並ぶ。広場の階段は解説を聞くと神社の参道であつたことを連想できるが、階段の手すりフェンスにはいたるところにきらびやかなデザイン錠が結ばれ、カップルのラブスポットになっている。本殿、拝殿があつたであろう広場には被弾の跡も生々しい深緑の戦車2台に大砲二門が展示され、ソ連軍の象徴である赤い星の石碑が置かれ



被弾痕が生々しい戦車が展示されていた(旧樺太神社)

る。

日本人として、神社の痕跡がこれほどまでに消されていると、敗戦の無念が湧き上がるのを禁じ得ないが、せめてもの救いは、花が植えられ比較的綺麗に整備されていることと、この場所が若者の愛の誓いの場所になって今も親しまれていることだ。

帰国して調べてみると、2012年に訪問したとされる樺太神社跡地についてのネット上のレポートでは、社跡には落書きだらけの「宝物殿」があるのみとされ、戦車が展示されている社跡広場等の記述は一切ない。鳥居跡広場の街燈支柱には「2013」の数字と樺太地図が描かれていることから、2013年以降に全体が大がかりに整備されたようだ。

神社跡の次はロシア正教会へ向かう。いわば宗教リレー。ガガーリン公園に隣接してホテルにも近いロシア正教会は、白壁に青の屋根、金の「ネギ坊主」に八端十字架、鐘楼まで4階建ての大きな趣のある教会で、地下は土産物店になっている。正門の両サイドでは一日中ボランティアと思われるグ

ループが交代で寄付を募っている。お堂内は天井よりこぼれる日光にアイコンが浮かび、学生時代に函館で触れ親しんだ「ハリストス正教会」を思い出す。

わずかな見学時間であるが、頻繁に参拝者が訪れる。ウロウロ、きよろきよろして頻繁にシャッターをきる我々観光客は相当に目障りであろうに、気をそらすことなく一心不乱にアイコンに口づけし祈る様子から強い信仰心が窺える。ソ連時代の弾圧にじっと強く耐え抜いた信仰心である。働いている方々は皆さん奉仕活動なのだろう。こちらも一心不乱にロウソクの取り換えや清掃を行っている。さも観光客等いないかのように、そして笑わない。

協会を出て、バスの車窓から有名な郷土博物館等の外観を眺めつつ、レーニン広場に向う。

有名な他の観光スポットには立ち寄らない。どうしてかというところ、豊原市街はそれ程の広さではなく、また観光スポットも限られるとのこと。従って、午前中にバスで周ってしまおうと、午後の自由時間に訪ねるところがなくなってしまう

という、奥深い理由があった。

レーニン広場は、文字通りソ連の象徴である巨大な「レーニン像」が建つ豊原駅前大きな広場である。ソ連の崩壊によりロシアだけではなく世界各地で「レーニン像」の撤去が行われたが、全てではなく、まだまだ世界には沢山のレーニン像がある。どれだけ沢山のレーニン像が建てられていたのだろう。旧ソ連の中央アジアや影響下にあった東欧諸国での撤去のニュースは大きく報道されていた記憶がある。豊原で撤去しないのはレーニン崇拜、ソ連崇拜が強いのかと思ったが、同行者の中に「撤去にお金がかかるから」といった方が観光にプラスだから」という人がいた。なるほど真実味が

ある。

花壇と噴水、洒落た街燈とベンチ、沢山の清潔なゴミ箱。豊原の玄関、というよりサハリン州都として相應しい清潔な華やかさを持っている広場だ。

ゴミ箱と言えば豊原の中心街には意外といつては失礼だがゴミ箱が多い。蓋が黄色で本体が緑、日本の様に分別にはなっていないが数は多い。あまり大きくないものも関わらずゴミが溢れていないのは、常時回収されているからだろう。

余談だが、午後の自由時間にカムニスキーチェスキー大通りを歩いていると、あるゴミ箱に「黄色い薔薇の花束」が無造作に捨ててあった。イエロードットの薔薇である……。「イエロードットの薔薇」には「君を忘れない」という意味がある。花をこよなく大切にするイメージがあるロシアなので不思議に思ったが……。

若者が若い娘に恋をした。しかし、家の事情で数日後この



レーニン像(豊原駅前)

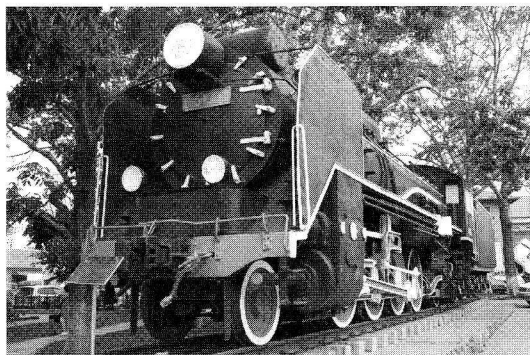
地を離れなければならない。若者は娘に告白し、そして「イエロードット」の薔薇の花束」をプレゼントした。「君を忘れない」。一生懸命に働いて稼いだ金で買った高価な薔薇だ。若い娘は天使のような笑顔で受け取った。若者は、これ以上ない幸せに、町を彷徨いながら一人微笑む。どれくらい歩いたのだろう、ふと、街角のゴミ箱に目がとまった。そこには、見覚えのある「イエロードット」の薔薇の花束」が無造作に捨てられていた……。

なんて悲恋があったのかも。

本題に戻る。

豊原駅の北には日本領時代に活躍したD51蒸気機関車が展示され、鉄道歴史記念博物館の一部になっている。D51は腐食を防ぐため塗装されているのだが、何とも大ざっぱで、失礼な言い方だが「子供の塗り絵」のようだ。日本であれば今にも走り出しそうな状態で保存するのであるが、保存に対する思想が違う。

周辺に自由市場等、興味ある観光スポットが多いことを確認して



展示されていたD-51

ホテルへ戻り、ランチをとりながら添乗員より自由行動における注意事項を聞く。豊原の治安は良い。昼間に関しては何も懸念はない。タクシーに関しては、流しのタクシーは危険な場合がある。ホテルやレストラン等で料金を確認して呼んでもらうのが安全だ。

豊原は樺太第一と言われる鈴谷平野に主要道路を基盤目状に配置して建設された都市で、札幌など明治時代の開拓によって建設された北海道の各都市に似ている。やはり日本が建設した街なのだ。主要部は徒歩により2時間程で一周

することができる。

午後は、主要な通りを時計回りに一周し、沿道の観光スポットを巡ることにした。

主要道路の車道部分は比較的整備され舗装もしっかりしているが、路肩や歩道はどれほど長い期間整備をしていないのか、大きな穴が各所に開いて埃っぽいところが多い。

市内では日本車の多さに驚く。大型バスは韓国製、路線バスとして使用されているマイクロバスは外国製が多いが、一般の乗用車、商用車に関しては圧倒的に日本車が多い。私の感覚的では90%、特にトヨタ車の人気が高い。しかしながら、とにかく汚れているうえにボロボロだ。バンパーが大きく破損した車、リアウィンドウがベニヤの車等々見ていて楽しくなってしまうほどだ。ボロボロになるまでボロボロのまま走っている。また、面白いことに、日本で使用した車両を塗り直すことなくそのまま使っているため、日本で見慣れた宅急便の車両が走っていたり、建設会社の企業名がそのままだったり、フロントに「ケータイでも

(意味は不明)」と書かれたランドクルーザー等々。これもまた楽しめる。ナンバープレートが日本の車の所定の取付位置や大きさと合わず、かなり無理な工夫をして、針金等で括り付けている車もある。どのような経緯で日本からこの地へ渡ってきた車達かは知らないが、中古とはいえ他国の車より高価であるう日本車がこれだけ愛されているのは日本人としては誇りに思う。

このような話を書くと、かなり乱暴な運転で喧騒状態の交通状況を想像するであろうが、そうではない。運転マナーは素晴らしく、横断しようとする人をみると、皆必ず優しく停車する。信号がなくとも日本よりも歩行者に優しい。稚内でロシア人についての話をすると、ロシア漁船の船員の話をよく耳にする。どうしてもマイナスイメージの情報がいろいろ、そのままロシアのイメージを決めてしまっている間違いだ。

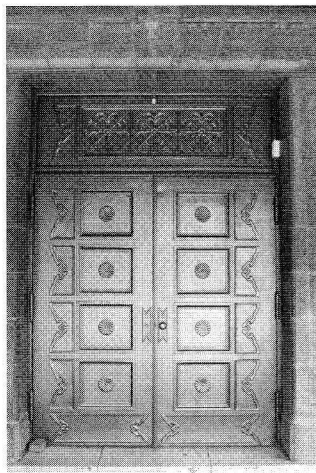
また一方、「サハリン総合大学、東洋学大学」のキャンパスで目にした光景は、ドイツ車をはじめピカピカの高級外車での通学や送迎



壊れたまま走っている日本車



サハリン郷土博物館(旧樺太庁舎)



菊の御紋があらわれた重厚な旧樺太庁舎玄関(サハリン郷土博物館)

業、金融関係の延びが大きい。

でオンボロの車は珍しくなるだろう。

の様子だ。樺太も世界的な傾向の御多分にもれず貧富の差が広がっているといわれている。樺太の平均給与は地域と職種によって大きく異なるようだ。

いくつかの説があるが、公式なサハリン州統計局の調査によると、最低が商業や自動車整備、日用品製造の職種で「2万ルーブル(6万円)／月、前年比はほぼ横ばい」

から、鉱業(資源採掘)従事者の「12万ルーブル(36万円)／月、前年比

140%」までと、格差は広がっている。鉱業従事者の給与が高いのはサハリン2がらみか。因みに公務員は5万ルーブル(15万円)と金融関係者に次ぐ3位で上位にある。ただし、実勢としては、アルバイトなどを加味するともっと低いのであろうか、3万5千円という話も聞いた。

給与の前年比平均は120%で、先ほどの鉱業従事者以外には公務員、漁業従事者、不動産業、加工

業、金融関係の延びが大きい。

いたが、最近ではプーチン、メドベージェフ、再びプーチンの大統領継続体制による極東重視政策で大きな変化が起きている。

プーチン大統領が、極東での投資が不活発であることに怒り、州幹部を厳しく叱責し投資促進を命令したといわれる。また、サハリン2の収益は、生産物分与協定に基づき、サハリン州に将来にわたって多額の税収の形で貢献する。

近年の年120%の給与の伸びは、

日本領時代の樺太庁博物館は、

そのまま、サハリン郷土博物館として使用されている。建物は保存状態も良く使用され、日本式の瓦屋根、菊の御紋が多数施された玄関扉、樺太神社に隣接していた護国神社から移したとされる狛犬等

が現存し、水と緑の前庭は市民の憩いの場でもある。と突然、白いウェディングドレスの花嫁が現れた。結婚式の記念撮影の会場としても重宝されているようだ。

町を一回りしてみると、日本領時代の建物は大部分なくなっているが、この郷土博物館をはじめ、旧拓銀ビルや樺太庁の会議室、いくつかの病院跡等、ソ連共産党時

樺太に戦後漸く本格的な投資が始まったことの裏返しといえる。いずれ、泥まみれ

代、ペレストロイカ、新ロシアの時代と、激動の70年を経たことを考えると残っている方だ。一部は旅行の注意事項にあった軍事機密施設等であるため、撮影などには注意を払わなければならないもの、半日程度では時間が全く足りないほど、見るものはある。

郷土資料館は、展示物をカメラ撮影するかどうかで料金が違う。切符売りの叔母さんが無表情でカメラの絵が書いた紙を示す。「ダー(はい)」「ニエート(いいえ)」いずれかの絵を指さして切符を買う。入管後特に監視をしているわけでもなく自己申告の為あまり意味がないように思うが、良心を信ずる面白いシステムだ。

北方の自然や生物のはく製コーナー、アイヌ民族のコーナー等見どころは多いが、間宮林蔵について詳細に展示があることには驚いた。大変好意的に展示されている。ロシアから見ても間宮林蔵の偉業は評価されているのだ。

ポツダム宣言による南北分割の結果、北緯50度の国境線に4基設置された、国境標石は有名だ。表面(日本側)に菊の御紋と「大日本

帝國」「境界」の文字、裏面に双頭の鷲と「ロシア」「国境」の文字(もちろんロシア語)。幾分欠けた箇所が目立つわずか高さ68cm、幅47cm、厚さ27cmの石であるが、この国境をめぐる様々なエピソードが、凝縮されている重みがある。

気持ち昂ぶったのは、鉦工業の発展を展示したコーナー壁に掲げられた写真パネル。終戦による接収後の王子製紙真岡工場や、内測炭鉦(ブイコフ炭鉦)の活気あふれる操業風景で、ソ連政府から生産貢献の表彰を受ける様子が華々しく写っている。当時日本から接収した工場や鉦山はいずれも最新鋭で、おそらくソ連の中でも最高の生産力を誇っていただろう。しかしながら現在はいずれも廃工、廃坑となってしまう。王子製紙の工場跡については後述するが、結局、接収して間もなくは稼働可能であったものの、技術やメンテナンス部材の製造能力がなく、一旦稼働が停止するとそれを復活させる術なく寿命を縮めることになったのだろう。「戦争に敗けた」現実を感じさせる展示であった。

そして同じコーナーにはサハリン2の模型が展示されている。サハリン2は、株主として三井物産、三菱商事、プラント建設には千代田化工建設、東洋エンジニアリングが参加し重要な役割を担っている。ロシア政府も日本の力に大いに期待しているのだ。ソ連時代の反省が生きて、日本の技術や管理能力を求めているのだとすれば、王子製紙工場や内測炭鉦に関わっていた日本人の魂も救われる。

資料館から、ゆっくり歩いて20分程度で豊原駅に着く。

駅は重要な軍事施設で駅舎内撮影禁止ということから、緊張しながら豊原駅舎に入ってみた。カメラ自体をぶら下げての歩行に対しては何も言われない。駅舎内には昔からのキオスク形式の売店とコンビニのようなショップ、ビールも飲める喫茶コーナーがある。警察なのか軍人なのか監視の目は多い。樺太では外国人がふらっと列車に乗るのは難しいと言われた。鉄道施設が重要な軍事施設であること、訪問地区については当局に事前に申請し許可が必要なことを

考えると、ふらっとぶらり旅というのは困難であろう。加えて、町では英語も通じない。様々な表示板、看板、ネオンは本当にごくわずか英語があるが、99・9%ロシア語のみである。レストラン等で英語が通じたのは、レーニン通りに面した有名な「カフェNo.1」だけであった。もちろん全ての店を回ったわけではないので、豊原駅の周辺にはいくつかそのような店やホテルもあるであろうが、全体として稀なのは事実だ。それでも、駅ではビールを注文して飲んだ。酒の注文だけは、言葉がわからなくてもできる。

豊原駅のすぐ北側には鉄道線路を挟んで東西に自由市場が広がる。昔からの露店タイプと近代的なモールが混在するかなり規模の大きな市場だ。露店タイプには衣料や日用雑貨店と八百屋が多い。日本の昭和30年代の風情だ。樺太は路地野菜の栽培には天候的な制約が大きいとのこと、ハウスものが多いということだが、量は充分にある。一般的な果実類も豊富に陳列されているが、樺太らしい特徴



ベリー類の路上販売(豊原の自由市場)

り二周りも大きい。一番多く目につくのはサーモン、トラウト系の燻製。半身で600〜900ルーブル、同じ燻製でもチップの違いによって色々な種類があり、香辛料での味付けを施したものもあって見ていて楽しい。肉厚で見るからに旨そうだ。燻製ではない塩鮭とトラウトは一匹250〜650ルーブル。他には海老、蟹、鰯、おひょう、ホッケ等、北のおなじみの海の恵みが溢れる。印象としてはかなりの豊かさだ。

もするが、やり方が違うだけで行っていることは日本と同じだ。日本は数が少なく、警備会社の制服を着て、そしてニコニコと「詐欺師顔」をしているのが違う。このスーパーで買った燻製小鰯のオイル漬けは唸るほど旨かった。ビールによくウオッカによい。お土産にも最適なサイズと価格である。一般市民にとって日用品は、中国、韓国製品の人気が高いが、本心は日本製品が欲しいそう。価格的な問題で購入できないが皆日本製品への関心が高い。稚内へ来るロシア人は市内のデパートで日本製品を大量に買い込んで持ち帰ると聞く。

夕食は、オプシオンで申し込んでいたレストラン「フタローク」。ロシアの伝統料理を売り物にしている。鰯の前菜に赤玉ねぎをふんだんに使いちよつと酸味のある待望のボルシチと小さく食べやすいキャベツロールが5個。旨い。特にキャベツロールは絶品だ。ウオッカの乾杯を繰り返して食事は大変満足、充実の時間であった。ただし、キャベツロールの皿を途中で片付けられるのではないかという恐怖と闘いながら。

明日は朝から真岡への旅なので、ゆつくりと豊原市内を歩けるのはこの日だけだった。

宿に帰って、地図を見ながら心残りが一つあった。回転寿司があるのだ。店名が「日本みたい」。どんなものが、どんな店で回っているのか? いつかくる次回に期待しよう。それまで無事に回っていてくれ。(次号に続く)

(訂正)前号記事50Pの写真―4は筆者の要望により削除します。

は、木母、フレップ(こけもも)等、ロシア料理によく使われる各種ベリー類と、これもロシア料理の代表的素材のキノコが並ぶ。店舗を持たずにそれだけを瓶等にいれて路上販売をしているケースも多い。魚介類と肉類はもっぱら大規模なモールの中、冷凍、冷蔵設備の完備している専門店で売っている。びつくりするのは各魚介類のサイズ。それぞれが日本のものより明らかに大きい。特に冷凍されたホタテ貝の貝柱は、日本の4年物よ

ホテルへの帰路、ミネラルウォーターと夜の宴会用品を仕入れにスーパーマーケットによった。豊原の中心部にあるスーパーだけに何でもあり、日本の食品も手に入る。住んでいても食品に限っては大きな不自由は感じないだろう。店内には、警備員なのか監視員なのか目つきの鋭い数名の男が巡回し買い物かごの片付けをしながら目を光らせている。万引きがあるのだろう。日本より物々しい感じ

9月6、7日の二日間、道北9市(旭川市、稚内市、留萌市、紋別市、士別市、名寄市、深川市、富良野市、芦別市)連携で、道北物産展2014が豊原市内で開催された。稚内市のゆるキャラマスコット「りんどうくん」も渡樺して活躍したらしいが、2万名もの来場者を集めた。樺太の収入ベースが上がるにつれ、日本製品は手の届くところになりつつあるのだろう。知恵を出すチャンスだ。